

伊東市小室山公園椿園と川奈ホテルを訪ねて
日本ツバキ協会行事に参加して

茨城 小泉不二男

平成25年12月7日(土)、協会主催の伊東市小室山公園椿園見学会に茨城からは単身で参加した。

まず午前8時26分東京発こだまで熱海まで行く。乗り換えのホームでたまたま協会役員の河原澄子さん、遊馬賢治さんと一緒になり、揃って伊東に向かった。電車は山と海に挟まれながら走っていく。斜面の蜜柑畑の黄色い実が鮮やかだ。向かい側は伊豆の海が冬の陽にキラキラ光っている。あれこれ話をしている間に9時50分に伊東に着く。

箱田会長はじめ10数名と合流。残り10数名が自家用車で小室山に向かい参加者は30人を超えるという。伊東駅前バス駐車場では今回の企画運営担当理事の鈴木興治さんが時刻表を見たり係員に時間を問い合わせたりと進行に余念がない。

海産物の土産物屋の看板を眺めたりしているうちにやって来たバスに乗る。乗り合わせたのは御殿場支部の方々。女性ばかりで皆さんお元気だ。支部結成されて間もない由。車中で楽しそうなおしゃべりが続く。

伊東商業高校前下車。学校の正門近くにソテツが青々と葉を伸ばしている。その向かいが小室山椿園入口。案内板に勘次郎が覆いかぶさるように赤い花を着けている。満開だ。若い職員の方が資料を携えて待っている。一通り説明を聞いて園内に進む。



小室山椿園入口



園内の坂道を登る

整備された園路は上り坂ながらも歩きやすい。椿の葉が青々として樹勢がよく枝が元気に伸びている。花は見当たらず固い蕾ばかり。黙々と歩く。

登りきって平坦地に出ると何人かが集まっている。ピンクに一重の椿。株元に石柱が立てられている。「関戸太郎庵」と彫ってある。石の名札であった。見回すと多くの株元にこの石柱が立てられている。これならば品種名落ちはない。周囲は下草もなく、枝も手入れが行き届いている。



品種名を刻んだ石柱



朝露あるいは梅ヶ香

歩むにつれて、「くす玉」、「日本の誉」、「近江衣」と咲いている。箱田会長から近江衣は照り葉が椿に近いがハルサザンカとのこと。

続いて「朝露」がある。葉も花も咲きぶりも近江衣同様に、ハルサザンカの特徴を備えている。八重で薄いピンク、濃いピンクと咲き分けている。「どうもこれは「梅ヶ香」のような気がする」と会長がいわれる。帰宅後「名鑑」を開いてみるに「朝露」は見あたらなかった。何かの事情で梅ヶ香が朝露になってしまったものか。

「梅ヶ香」を見るのは平成18年に浜松市のハルサザンカ研究者村松剛さんを訪ねて以来になる。村松さんは稔性を持つ梅ヶ香を実生し、新品種の育成に取り組んでいた。現在の多くのハルサザンカ品種の母樹となったと推測されていた。

園にはこの朝露の成木が何本もあり、みな青々と伸び盛んに花を咲かせていた。

椿園をさらに進むと次第に見晴らしが良くなる。遠くに伊豆の山々が連なりその向こうが富士山だそうだ。天気はいいが霞がかかって見えない。皆さん足早でいつの間にか会長と二人になってしまった。



グランサム椿



初雁の枝変わり（強いて言えば桃色昭和侘介か）

次にグランサム椿が目につく。

樹高は5mくらい。黄色のおしべがふっくらした和菓子の玉のようだ。温暖な伊東で霜の害も受けず繁っている。会長によれば「日本に導入された当座は、寒さに弱いといわれたものだが、今や東京でも育っている」とか。

グランサムの最初の交配種といわれるオートムグローリーの木もあった。かつて協会創立50周年記念総会の行われた学士会館で見たことがある。花がないのが残念だ。

茨城で同じ交配種の「如月」を育てている。寒さに負けず1mほどになったがまだ花を着けない。千葉支部の宇津木勘さんを訪ねた際に苗をいただいたものだ。花はピンクだった。いずれ土浦の12月の早咲き椿展に出せることを楽しみに育てている。

さらに進むと今度は初雁が咲いている。

この椿園には大きな初雁が数本ある。花がびっしりついている。なかにピンクの花が咲いている枝がある。1週間前の土浦の早咲き椿展で桃色昭和侘介として出されていたものとはほぼ同じ。樹下の石柱には昭和侘助とある。

昭和53年発刊の現代椿集には、初雁と昭和侘助は酷似し、関西の古くからの栽培種で彼の地では柳葉侘助あるいは雪中花とよばれた旨が記されている。平成22年発刊の日本ツバキ図鑑では昭和侘助を初雁の別名とし、文献名をあげて江戸期は数寄屋の名で呼ばれたとしている。ちなみに「図鑑」には桃色昭和侘助は載っていないものの同じく枝変わりの覆輪侘助が採られている。

幹は足の太ももくらいの太さで、彫刻刀で削ったような線が何本もある。リスに食害されたものだ。10年くらい前、初雁の木がこんなにあるなら1個くらい結実しているのではないかと、それならその実を採取したいと考えた。まず園の許可を受け、次にJRに高枝切りバサミの持ち込みが可能なかを問い合わせたうえでハサミの刃を布で縛り槍を持つかのようにして電車に乗り、ようやく園に着いたのだが、実は一つも見あたらなかった。係の方に訊くと椿の実をリスが食べているのことで落胆した思い出がある。見れば木の傷跡が目につく。どうやらリスは今も健在らしい。

「けっこう花ありますね」などと会長と木の下にもぐったりしているところに、蛭田さんがやってきた。「皆さん、上でお待ちです」とのこと。バスで来たのと同じくらいの人数が車ですでに着いているという。花大臣はサザンカにもあるねえ、などと花を惜しむ会長とともに斜面の園路を急

ぐ。



椿の館



サミット記念

上がりきったところが椿の館。2月の椿祭りの会場だという。30数名が初めて顔を合わせ、温かい紅茶をいただいた。職員の方の説明と鈴木理事の連絡などの後は、椿園見学再会。

椿の館正面の大きな藪椿を見る。高木で、見上げた深紅の花が冬の青空に映える。平成6年に開かれた第4回椿サミットに記念植樹されたという。今日の参加者のなかにこのサミットに参加した方は自分も含めていないようだった。20年の歳月が流れているのだ。



台湾ツバキの花



台湾ツバキの幹

同じ高木で白い花を着けている木がある。台湾椿と札がある。初めて目にする。「大船植物園とここの2か所にある」とは箱田会長の言。この園で一番の高さだ。花はどこことなくグランサムに似ている。葉は大きく細く、椿とは印象が異なる。

いのくち椿館発行「原種ツバキ図鑑」(桐野秋豊執筆)に、小室山椿園に成木があると記されている。古く協会誌第7号(昭和44年)に台湾ツバキに関する香川県の井本長谷親という人の寄稿があり、昭和39年京都大学農学部上加茂試験地で実生1年生苗をもらい、昭和42年に初花があり、今年(昭和44年)は木の高さ80cm、90個のつぼみがあると報告している。さらに桐野先生は、神戸カメラ会誌「カメラマン」48号(2008年)に「私のゴールドニア(台湾ツバキ属)探査記」を掲載されベトナムから持ち帰った紅のぼかしの入るゴールドニア・トンキネンシスを紹介されている。機会があれば実物を見たいものである。

花の少ない12月にもかかわらず椿が見尽くせないほど咲いている。園内をうろうろしているうちに11時20分の集合時間になり、心残りながら園を出る。集合場所の椿園入口で、看板が小さいなどとケチをつけているうちに川奈ホテルのマイクロバスが到着。鈴木さんと品の良さそうな初老のホテルマンに導かれて乗り込む。自家用車組は別動隊としてホテルに向かうとのこと。

約30分で川奈ホテル着。戦前からのゴルフ場として知られ、ホテルによれば三大名門コースの一つに数えられるとか。古くはマリリン・モンローが新婚旅行で宿泊したり、新しいところではエリツィン・ロシア大統領と橋本首相との首脳会談が行われたという。

海に突き出た岬のようなゴルフ場だけあって、レストランからの眺望が素晴らしい。ラウンジも

風格がある。



川奈ホテル

一同揃ったところで伊豆の海を眺める大広間で洋食を楽しむ。鈴木さんからホテルに椿が沢山植えられていることが紹介される。長く日本ツバキ協会の法人会員であったそうだ。

箱田会長が挨拶され、参加会員の自己紹介もあった。この夏台風による土砂崩れがあった大島からの参加もあった。



会食風景



食器



マリリン・モンロー

昼食後に椿を見て回りたいと思ったが、2時過ぎにはホテルの送りのバスが出るとのこと。1階の資料展示室で古い写真や創建者の大倉財閥の陶磁器類などを見る。

帰りは伊東から熱海に出て「こだま」で帰った。車中、遊馬さんから国鉄時代からJRまでの話をいろいろ聞いて退屈しなかった。

日帰りの小旅行ながら、冬の伊豆の風景を楽しみながら予想以上にいろいろの早咲き椿を見ることができた。秋に咲き出す椿あり、冬にほころぶ侘介あり、春に爛漫と咲く椿ありと椿は品種によって輝く時季が異なる。かつて4月下旬のこの園で、桐野先生から遅咲き椿についてのいろいろと教えて頂いたことがある。そのとき晩春に輝く椿を見た。今回12月の園で輝いている椿がこんなに多くあることを知り、早咲き椿の勉強会を開きたいと思ったほど収穫の多い椿旅だった。担当理事の鈴木興治さんをはじめ運営された方々に感謝を申し上げたい。